

## 『法華経』成立の諸問題

代表 三友健容（立正大学教授）

岩波文庫本の『法華経』の解題には一部の狂信的なグループによって『法華経』が制作されたと書かれているが、「狂信的」とは「狂った信仰」の持ち主たちが勝手に経典を創作したという意味合いにとれる。確かに『法華経』流布の過程には、多くの熱烈なる信仰者がいたことは間違いないが、それをもって『法華経』編纂時の時代にまで当てはめるのは、はなはだ学問的でないことは異論ないであろう。さて、一切衆生の救済を説く『法華経』も最澄と徳一の論争にみられるように、「三乗真実 一乗方便」であり、「無一不成仏」も「無の一は成仏できない」という差別思想だとする読み方もあるが、「小善成仏」を説いた経典として『大毘婆沙論』にも着目されるほど、西北インドにおおきな影響を与え、東アジアのひとびとのこころの拠り所となってきた。現在、『法華経』のとらえ方ひとつにしても、おおきな隔たりがある以上、『法華経』の本来の思想とはなにかを究明することは非常に重要なことである。『法華経』の成立問題を詳細に論じ『法華経成立史』を著した立正大学教授であり、日蓮宗僧侶であった布施浩岳（以下敬称略）は、釈尊金口の説法である『法華経』を段階的に成立したものであるという新説を発表したため、教壇追放・僧階剥奪にまで発展しかねないほど、日蓮宗に大きな衝撃を与えた。その後、『法華経』をはじめとする研究が自由になされるようになり、今日では、『法華経』編纂地は西北インド、ガンダーラのタクシラ、シルカプ、シルシュク周辺、編纂年代は世紀 150 年頃、編纂者はひとりの名もなき僧侶、部派仏教からの転向者、馬鳴、森林修行者（阿練若住）ではなく村落に住していた比丘など、さまざまな意見が出されている。

本パネルでは、今日までの成果をもとに、『法華経』成立の諸問題について発表してもらい、誰もが関心をもっている、いつ、どこで、だれによって編纂されたのかについても討究してもらった。

## 1. 法華経と涅槃経—編纂過程からみた両者の共通性—

下田正弘（東京大学教授）は、『法華経』と『涅槃経』との成立過程の共通性に着目し、見宝塔品と『涅槃経』には、塔のうちで「入定」する多宝如来の全身の舍利と分身の集結に経の系譜が認められ、仏在世から仏滅への移行に律の系譜が認められるといい、語り手としての仏の一貫性があるという見解を明らかにした。

## 2. 作者の創作意趣—〈仏滅後〉の衆生の成仏道—

苺谷定彦（種智院大学名誉教授）は、『法華経』は全体として首尾一貫した構成で、ひとりの無名の比丘によって作られた信仰表明の文学作品としての完成品（序品、方便品、譬喩品、信解品、宿世因縁品（但し仏の出現と雷鳴の喩え、大通智勝仏過去譚）、

法師品、見宝塔品、勸持品、從地湧出品、如来寿量品、常不輕品、神力品)とし、法師品以降は悪世(仏滅後)における自己の成仏を目的としているとする。そして既存の仏塔に対する信仰であり、ストゥーパやチャイトヤは如来の全身として信仰されていたのであって、多宝如来の塔の扉を開くということは如来の体を割くことであって、そのようなことはあり得ないとした。

### 3. 『法華経』を説く仏への接近

岡田行弘(立正大学法華経文化研究所特別所員)は、経典が成立するためには、仏陀の悟りを追体験し得たことを自他ともに認める強力な指導者が、宗教運動の中核として存在したことを想定せざるを得ないという勝呂信静説を妥当とし、釈迦仏を自分自身に投影し、釈迦仏と一体化することによって、仏のことはたる法華経を説くことが可能となったとする。そして、安樂行品の夢中のなかで仏陀と会うというのが、法華経作者の告白であり、仏になるというのが法華経の立場であるとした。

### 4. 方便寿量相依問題を論じて定期間段階集成説に及ぶ

伊藤瑞叡(立正大学教授)は、勝呂説を受けて『法華経』はある短期間に成立したのであって、全体を哲学的に考察することが大事であり、布施浩岳などの指摘した用語、文章の不統一というのは読み方が不十分だからだとして、佛教学以外の学問分野でおこなわれている分析法をもって論じると、はじめから方便品・寿量品が意図されたものであって、これはアショーカ法勅にみられる縁起法頌の「生」が方便品、「滅」が寿量品にあたり、勝呂説をもとに二十七品が一定期間に集成されたものであるとした。

### 5. “貧里”について考える—法華経成立の社会背景—

高橋堯英(立正大学教授)は、インド留学13年の実体験を活かして、『法華経』のなかにあられる「貧里」に着目し、考古学の成果などをもとに貨幣経済の発展との関連から論じ、『法華経』信奉者の時代的背景をあきらかにした。

以上の発表を踏まえて、だれもが関心をもっている『法華経』がいつ、どこで、だれがという編纂問題について、現段階ではコメントできないという慎重意見もあったが、世紀150年以前、西北インドで、ある主導者を中心に、『法華経』の説を仏説と認める人々によって是認され、流布されていったのであろうという。しかしながら、布施の指摘した諸問題はいまだ明確になったとはいえ、今後の詳細な検討を待たなければならないであろう。なお、時間の制約上、発表者が用意した原稿内容も十分に会場に理解されなかったのではないかと危惧されるので、本パネルの詳細は立正大学法華経文化研究所発行の『法華文化研究』で特集号を組んで、公刊する予定である。